

巨大建築 —城の建設—

Masonry Retaining Walls of the Nagoya Castle

内 藤 昌 (ないとう あきら)

名古屋工業大学教授 工学部社会開発工学科建築学系

東京工業大学教授 工学部建築学科 (併任)

重力にさからってあえて巨大建築を構築するということは、古今東西の別を問わず、いわば人類の夢であった。我が国の場合でいうなら、例えば源為憲が天禄元年(970)に著わした『口遊(くちずさみ)』によると、当時の三大建築として一番が出雲大社本殿、二番が東大寺大仏殿、そして三番が平安京大内裏大極殿であったことが知られている。

平安時代の東大寺大仏殿は、現存する江戸時代再建のものより大きく、高さ156尺(47.3m)ほどあり、したがってそれより巨大といわれた出雲大社本殿は、少なくとも160尺(48.5m)以上はあったらしい(320尺もあったとする説もある)。

このほか、高いことでは、東大寺七重塔の330尺(100m)といった例があるが、これらは、すべて下から眺めるだけの建築で、天守のように、そこに登って住む構造にはなっていない。

それだけに、織田信長が安土城に外観5層、内部地下(穴蔵という)1階、天守台石垣上6階の計7階という高層建築を築いたことは、まさに破天荒そのものであったといえよう。豊臣秀吉や徳川家康など、あとに続いた天下人は、常に大天守を築き、その建築規模を競っているのである。

それにしても、そうした際の歴史的目標になっていたのは、古来大きいことで有名であった東大寺大

仏殿である。安土城天守の建築費が、その大仏殿と同じ程度という記録がのこっており、大きさを比較しても、本丸の地表から最上階大棟までの高さは151.5尺(45.9m)で、大仏殿とほぼ同一に設計されている。暗い戦国時代の人心に平安楽土の夢をえがかせ、天下統一のロマンをかけるには、やはり大仏殿を意識して「大きいこと」が必要であった。

さて、安土・桃山時代は、木造高層建築としての天守が普及した時代である。巨大建築が、それこそ全国津々浦々に建てられたのである。

そこで史料で判明するかぎりの大規模天守を比較すると、確かに天守台石垣上1階の平面積では、安土城は283.1京間坪=1098.5m²で史上最大級といえるが、家康造営の慶長度江戸城、同名古屋城、秀忠造営の元和度江戸城、同寛永度大坂(阪)城、家光造営の寛永度江戸城などは、徳川幕府が天下普請しただけあって、その規模をこえるものがほとんどである。

なかでも高さ(地表より大棟上迄)では、寛永度江戸城が193.5尺(58.6m)で、また建築延床面積では名古屋城が1140.6京間坪(4425.9m²)で空前絶後となっていた。やはり「尾張名古屋は城でもつ」だけのことはあったのである。